

ウクライナ侵攻 芸術家も抑圧

北大研究センターが緊急セミナー

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター（SRC）は6日、ロシアのウクライナ侵攻が文化面にもたらす影響をテーマにした緊急セミナーをオンライン上で開いた。国内外から約500人が参加。ロシアとウクライナの文化に精通した有識者6人が、両国の芸術家らが置かれた現況を報告した。

演劇に詳しい伊藤愉氏（明治大学）は、ロシアではプーチン大統領が報道規制を強化する法案に署名した4日以降、「積極的に抗

議していた演劇雑誌も、記事の削除を余儀なくされている」と説明。「舞台芸術の多くが国の助成金で維持されているため、沈黙せざるを得ない状況」と伝えた。梅津紀雄氏（工学院大学）は、ロシアの世界的指揮者ゲルギエフがオーケストラの首席指揮者を解任されたり、協力関係の終了を告げられている背景を説明。また、抗議として、クラシックコンサートでロシアの音楽作品の差し替えが相次いでいることを紹介した。文化的制裁を危惧する声

もある。リスクを冒して侵攻に抗議するロシアの映画製作者もいる中で、梶山祐治氏（筑波大学）は「（そ



ロシアとウクライナのアーティストの現況について講演した有識者ら

ういう作品も排除するのであれば、抑圧的な状況を招くだけで、プロパガンダとやっていることは変わらない」と指摘した。

鴻野わか菜氏（早稲田大学）は、表現の自由が奪われたソ連時代と現在の状況が酷似しているとし、「（当時の）ソ連の作家の作品を購入、展示して支援する外国人の役割は大きかった」と紹介。「現地の芸術家を支援し、交流することで、政治に対抗するアーティストやそれに共感する市民に希望をもたらす」と話した。

セミナーの内容は9～11日にインターネット上で再配信予定。詳細はSRCのホームページへ。

（牧内奏）